

# 山と博物館

第19巻

第10号

1972年10月25日

大町山岳博物館

## 人と水

「天声人語」に地方の水はうまいといった意味の文が載っていた。たしかにその通りだと思う。私もたまに都会地に出かけるが、水のまずさにはへきえきする。だから、地方の水のうまさを一番敏感に感じとるのは都会地の人々であることも良くわかる。

週休二日制がレジヤームに拍車をかけ、ネコもシヤクシも地方へくと押しかける。それも多くは交通業者のベルコンに乗っかって。また、更に金銭的余裕のある人々は、緑豊かな地方にセカンド・ハウスをかまえる。不動産屋は至る所造成し、結構繁昌しているようである。

地方でも近年は上水道が完備しつつあるが、一昔前までは川水が貴重な生活用水であり、住民は水源や川を一人一人が大切にしていた。上水道ができて、それに変わりはしない。水はそこに生活するための基盤であることを充分承知しているからである。ところが、都会の水不足で水がありがたさを身にしみてわかつているはずの外来者の一部には、それを平気で踏みつける者があり、住民からひんしゆくをかう結果になる。

水を住民全体の財産と考え、大切にしているのを汚すことは、それが例え高度生長のヒズミ人間によるものであっても許されるべきではないし、彼らは地方からはじき出されても当然のことであろう。

(グチ猿)



ナメコ

小谷村にて

# 北安曇地方の食用キノコ (予報) (三)

長 沢 武



ホンシメジ

(3) カラマツ林のキノコ  
シロヌメリイグチ 夏・秋、特に初秋カラマツの林内というよりもその周辺の草叢に群生または散生する。ハナイグチ大で、傘の色は灰白色であるので草の中では目につきにくい、稲刈り前の草を刈った土手や川筋、道端によく見かける。

ハナイグチ 一般に馴染み深いキノコで、手近かなカラマツ林で、しかも多量に素人も採集できるキノコ。安曇地方ではリコボウまたはジコボウと呼んでいる。傘裏の管孔部分は不消化であるので、上手な食べ方はこの部分を指先でかき取って使用するのがよい。

アマハナイグチ カラマツ林に限らずアカマツ林にも出るキノコで、大きき型共ハナイグチに似ているが、傘裏面が繊維質のいちぢ

るしいササクレに覆れて柔らかい感じがする。と、孔口は大小不同の不整形、茎のツバより上は黄色で網目模様があり、下方は傘と同色で繊維状ササクレがあり、内部は中空であることが区別点。

(4) 高山帯針葉樹林のキノコ  
ウスタケ 低地の針葉樹林にも生るが、高山帯のハイマツ、シラビソ、トウヒ、ヒメコマツなどの林下に多発するキノコで、登山の際思わぬ味覚を味わうことができる。幼時は角笛形、のちにはラッパ形となる。肉厚く内面は黄土色の地に朱紅色または帯紫色の斑紋がコウタケのようなササクレがあり、根元近くまで管状となっている。高さ10〜18センチ。

以上その他既述のマツタケは初秋、モミヤコメツガ林に、アマハナイグチ、ヤマイグチ、ツエタケも高山帯の針葉樹下に多発し、登山時の食膳に供することができる。

## 六、ナラとアカマツを中心とした混生林のキノコ

ホンシメジ 匂いマツダケ味シメジと言われ、古くから市販もされている馴染み深いキノコ。ナラが主体でその中にアカマツがとぼとぼある所によく見事な列を作って発生する。茎は充実して堅く、根元は太く普通数本つづの株となつて発生する事、ヒダは白色で密、湯でると先端の傘の周縁部の近くはちぢれる性質などが、毒菌のクサウラベニタケ、イッポンシメジとの相違点である。

シヤカシメジ 安曇地方ではカブツセンボン、カブツシメジなどと呼んでいる。握りコブシ大かそれ以上の根塊から数十本の小さなシメジが出るもので、ホンシメジより一週間くらい発生時期が早い。一本一本は小さいな

種 名	傘の径センチ	傘の 状態	ヒダ	茎	辛い乳液の分泌 食毒別
ツチカブリ	6-18	白色・じょうご型	きわめて密	高3-9 茎10-14	あり
ツチカブリモドキ	5-8	白色	わずかに黄色	高4-6 茎15-20	あり
ケシロハツタケ	8-30	白色・短毛生	白色・疎	高10-18 茎15-16	あり
ケシロハツモドキ	4-9	白色・短毛で覆われる	白色・疎	表面微毛有	あり
			やや密・白色	太く短かく白色	あり
					無毒

がらも、姿、色、味共ホンシメジにそっくり。アカヤマドリ イグチの仲間夏・秋に孤立または散生、大きなものでは傘の至20センチ達するものがある。傘の表面は橙褐色〜濃黄土色で、はじめ全面に脳状のシワを生じ、やがて表皮がひび割れるようになり黄色の肉を現す。茎は黄色の地に褐色の粒状のササクレを密布する。湯でると傘から黄色の汁が出る。

以上の他前述のアイシメジ、キイシメジ、シモフリシメジがよくこの混生林に発生する他、クロカワもアカマツの多いナラとの混生林に発生する。

## 七、樹種を選ばず発生するキノコ

ツエタケ 夏・秋、広葉樹、針葉樹時にはタケ、ササ林内にも点々と発生するキノコで傘の至4-11センチ、茎の高さ5-20センチ、0.4-1.0センチとさまざま説明してきた中では一番スマートな弱いキノコで、傘の色は淡褐色〜淡灰褐色で放射状のしわがあり、ヒダは白色または帯黄色、茎はネズミ色中空で、下部は深く地中に入る。

オオハラタケ 初夏・秋、いろいろな林内や原野に一本づつ発生、傘の色は黄褐色で全面に同色の細かなササクレがあり、ヒダははじめの頃白色だが次第にピンク色から灰桃色となり、最後に黒褐色となる性質がある。膜質のツバがあり茎ははじめ充実やがて中空となるのが特徴。

シロハツ 夏から秋にかけ各種の林内、藪の下などにぼつ／＼と発生する。チチタケのような姿をし、傘の色ははじめ白色、やがて黄土色となりじょうご型となる。ヒダは白色であるが茎に接する部分は少し青味をおびるのが特徴。垂生、茎は短かく2-5センチ、ヒダに接する部分は青味をおびる。姉妹種にシロ

ハツモドキ(食)があるが、ヒダと茎の接点附近に青味がないこと、かむと辛苦味のあることで区別できる。

チチタケ 初夏から秋(夏が中心)ナラが主であるが、各種林内の開けた道路端などに発生。傘は至3-5センチ、茎の高さ4-8センチで表面は赤褐色をし中央浅くくぼむ。ちよつとさわつただけですぐ白い乳液を出す性質があり、茎の内部は中空。肉は堅いが縦にさげずにかける。姉妹種にヒロハチチタケがある。傘の表面暗黄褐色、茎の内部は充実するのが区別点。

ツチカブリ 傘は大型、中央部浅くくぼんだじょうご型、はじめ白色だがやがて汚黄色のシミを帯びてくる。傘をこわすと白色の乳液を分泌するが、変色することなく非常に辛い。茎は短かく太くほとんど土中に埋れているので、傘も土や落葉をかぶる状態で、名前の由縁となつている。料理する時は薄く切つて2-3時間水にさらし、辛い乳液を洗い流してから用いる。夏・秋発生。姉妹種にツチカブリモドキ、ケシロハツモドキ、ケシロハツタケがありその区別点は表の通り。

ヤマドリタケ イグチの仲間、傘の蓋が20センチにもなる巨大型、夏・秋、孤立または散生、傘の表面は灰褐色〜黄土色、管孔ははじめ白色やがて黄色から暗緑色になる。茎は太く淡褐色で網目模様がある。

イロカワリ イグチの仲間、ハナイグチくらしい大きさ、傘は茶褐色、肉厚く黄色、傷つけると濃い青藍色に変色する性質がある。管孔ははじめ黄色、次第に褐色となる。孔口は不規則で円形または角形、茎は上部は鮮黄色、下半分は帯赤褐色で、短毛又は細点を密布する。夏・秋に発生。

イロカワリ イグチの仲間、ハナイグチくらしい大きさ、傘は茶褐色、肉厚く黄色、傷つけると濃い青藍色に変色する性質がある。管孔ははじめ黄色、次第に褐色となる。孔口は不規則で円形または角形、茎は上部は鮮黄色、下半分は帯赤褐色で、短毛又は細点を密布する。夏・秋に発生。

オニクチ 前種くらいの大さきになるイグチ。傘の表面は乾燥質で紫褐色か黒褐色のいちぢるしいササクレで覆れる。肉は厚く白色であるが、空気に触れると赤く変色する特徴がある。茎は上部白色、それから下は黒褐色でいちぢるしい繊維質に覆れる。

2. 切株、倒木、埋木、枯幹に発生するキノコ

1. 樹種を選ばず発生するキノコ  
ナラタケ 名前の如くナラを主体とするが他の樹種にも発生する。一般に馴染み深いキノコ、安曇地方ではモトアシ、またはナラノキモトアシと呼ぶものである。秋まれには梅雨時株立ちとなつて多量に群生するもので、傘は淡褐色で中央部に濃色の細かいササクレを密生、周辺に放射状の条線がある。茎の上部は白色でツバを有し、根元附近は黒味をおび繊維質。姉妹種にナラタケモトキがある。ツバを欠き、ヒダが荒く茎に長く推生するのが区別点である(食)。

クリタケ ナラタケに似て株立ちとなるキノコ。傘表面が美しいクリ色をしてツヤがあり、周辺部は淡色か淡黄色、肉はしまり黄色、ヒダははじめ黄白色のち淡紫褐色となる。茎は繊維質で、上半部は黄白色、下方はサビ褐色。ナラタケより発生時期は遅く、シモフリアメリカガサより早い時期に発生する。  
マスタケ 扇状かヘラ状で3-10個くらいの傘が重なりあつて発生する大型のキノコ。傘の表面は名前の如く鮮朱紅色か朱黄色で、マスか鮭の肉のような美しい色をしている。食用となるのは若い中で、手でさわつてみて水っぽく柔軟性と弾力のある頃のもので、成長して水分がなくなり褐色して白っぽくなつたものはボクボクして食用には不適。

種名	主に発生する樹種	発生時期	傘の色	茎の付け根	食毒別
ムキタケ	ナ	遅いツキヨタケが流れる頃	汚黄褐色	白色	毒あり
ツキヨタケ	ブ	早い	幼時淡黄褐色成長すると紫褐色か暗赤紫色	暗紫色の染紋あり、発光性	毒

アミヒラタケ キノコの型は扇状ないしウチワ状で、表面淡黄褐色に暗褐色の大型ササクレと繊維紋を生じ、ヒヨウの皮のような模様をする。肉は白色であるが乾くと堅いコルク質となる。管孔ははじめ白色の材木色となる。

2. 広葉樹に発生するキノコ

ナラタケモトキ ナラタケによく似たキノコで、その相違点はナラタケで説明した。  
ムキタケ 安曇地方でコムケと呼んでいるキノコ。秋、ナラ、ブナなどの広葉樹に多数発生する。はじめはウチワ型であるが、大きくなると半円形となる。全体がぼつてりとして水分を多量に含み、汚黄褐色をしている。よく似たキノコに毒菌のツキヨタケがある。その区別点は次表の通りであるので間違わないようにしたいもの、それにはブナに発生したこの種のキノコは、素人は採集しないのが安全。

ヒラタケ 市販のアルプスシメジはこのキノコの人工栽培品、春五月から秋にかけて庭先から深山まで発生、安曇地方ではワカエの名前で古くから親しまれている。全体がぼつてりした感じで、半円形のホンシメジといったキノコ、茎は傘の側方に申し訳程度につき、何枚も重なり合い一本の木に多数発生する。  
エノキタケ 市販されているものは暗室で人工栽培されたもの、野生のエノキタケはクワ、カキ、ヤナギ、ボブラの切株か倒木に群生する。傘の表面湿っている時は著しい粘性あり、黄褐色-栗褐色で周辺は淡色。茎は繊維質で強く、上方は黄褐色下方は黒褐色で短い密毛に覆れる。普通数本-数十本が株状となつて束生する。

ナメコ この種も人工栽培が盛んで、馴染み深いキノコであるが、自然ものはブナの倒木に晩秋発生する。  
ブナハリタケ 秋

主としてブナに重なり合つて群生する。半円形で茎の表面ははじめ白色のち黄色をおび特有の甘い芳香を放つ。傘の下面は腸を裏がえしたような針状突起で覆れる。繊維質で湯でてもこそばゆいので、酢の物かマヨネーズ和えに適す。安曇地方ではシシタケと呼ばれる。

姉妹種に形が大きく強靱な軟骨質となるエノハリタケがある。表面全面に短毛と肉質状の突起があり、傘下面の針ははじめ白色のち帯黄色から肉色をおびるようになるのが特徴。  
キクラゲ 支那料理に付き物のお馴染みのキノコ。普通数個または多数が互にゆる着し合つて塊りとなつて発生する。裏面は暗褐色-黒褐色、上面はや、淡色で湿っている時は柔軟ゼラチン質、乾くと堅い紙状となる。  
姉妹種のアラゲキクラゲ(食)は、全体が大柄で傘の径5-13cm、灰白色-暗褐色、下面は淡紫褐色で山麓に多く、キクラゲは深山のブナ、ミズナラ帯に発生する。

ゴムタケ ミズナラ、ブナを中心にその樹皮のさげ目に群生する。弾力のあるゴム状寒天質で、はじめは球形のち浅いすり鉢状か碗



ヒラタケ

状となる。大きさ1-4cm、高さ15-25cmの紫黒色のキノコ、シイタケ栽培の樺木にもよく発生する。

シイタケ 春と秋、主にナラに発生するお馴染みのキノコ。秋発生のものでは雨後のボツタリしたものは毒菌のツキヨタケとよく間違えるので注意が必要。  
マイタケ 東北地方では大量に発生し市販もされている有名なキノコで、最近長野県下で人工栽培に成功した。北安曇地方では白馬村の一部と小谷村の一部に発生することが知られている。人家附近でも稀には発生するが普通、二、三〇〇-一、五〇〇個の深山のミズナラかクリの老木の根元のみ発生し、一株で十数個に達する。姉妹種のシロマイタケは形質および発生場所樹種も同じであるが、マイタケより一周間近く早く発生、色ははじめ白色のち汚白黄色となり、味歯ぎはマイタケより少し落る。

ハナヒラニカワタケ キクラゲの仲間である天質、不規則な花弁状の無数の塊りからなり色は淡褐色-帯褐色、質薄く半透明、湿っている時はゼラチン質を現すが、乾くと収縮し堅く黒褐色となる。ナラかクリに発生する。歯切ればキクラゲより少し落る。

3. 針葉樹に発生するキノコ  
マツオウジ 初夏から秋にかけて主にマツに株立ちとなつて発生する。大きさはシメジ大から30cmに達するものもある。傘は扁平か浅い皿状で、表面は乾燥質、白色-淡黄色の地に褐色のササクレを生じ、周辺部は裂けて白い肉を現す。軽い樹脂の香がある。茎も淡黄色繊維状で、褐色のササクレがある。

スギエダタケ 夏から秋にかけスギ林の枝の埋木上に点々と発生する。可弱い感じのキノコで、ちよつとエノキタケに似て、傘は白色またはネズミ色で、中央部暗色、ヒダは疎で白色、茎は堅い軟骨質で細く太さは5cm前後で、黄土色-橙黄色で中空。  
(白馬村役場・大町山岳博物館調査員)

## 北アの初期登山者と

## 「五万分の一地図」

(3)

三井 嘉雄

剣岳の測量については、測量官が果たして山頂まで登ったかどうかで、論争をまき起したものである。それは、剣岳への初登はん者であるかどうかという意味でも、関心をもたれるべきことであつた。

三五会会報十七号(明治四十年)に、当時三十一歳の柴崎芳太郎の剣岳測量の記事が載っている。それによると、同年七月十二日に室堂から剣沢に移つて幕営し、十三日には長次郎谷(当時は無名谷)を登つて午前十一時頃、剣の山頂についた。測夫の生田信のほか人夫四人が同行したが、人夫の一人は途中で落伍してゐる。人跡未踏と信じられていた山頂で、彼等は錫杖の頭と槍の穂先があるのを発見し、しかも建物があつたような四尺四方の平地が三ヶ所もあり、頂上の西南の二、三



剣岳

間下には岩屋があつて、その中で焚火をしたことがあるのか木炭の破片も発見している。その日は剣沢の宿営地に戻つて、第二回目の登山では、測夫木山竹吉と人夫とともに、継ぎ合わせる六尺位になる柱を四本に分けて登り、頂上で一本にして建ててきた——と記されている。

この登山では、機械や測量材料は運搬不能であつたために持つて行かず、したがつて観測はしていない。ただ第二回目の登頂の日付の記載がなく、少し歯切れの悪い感じである。

ところが、剣岳へは明治四十二年七月に吉田孫四郎の一行が登頂して、登山者としての第一登を印している。その時の登山記録(「山岳」第五年第一号)の最後に「柴崎測量員登山の真偽」として、その根拠に、「余等が見たのは然らず、高一丈ばかりの一本の自然木の皮を剥ぎすぎない」とあつて、四本を継ぎたして一本にした測量標柱ではなかつたことを指摘した。

これに対して柴崎も、翌年の「山岳」にその反論をよせているが、あまりはつきりした内容のものではなかつた。

柴崎芳太郎の剣岳登頂の有無は別にしても、今までの登山史では測量のための登頂が七月十二日となつてゐるが、正確には七月十三日であることが、これで判る。また、測量標柱を建てたのは七月十四日か、それ以後ということになる。

そんなわけで、剣岳には今も三角点はなく、周囲の三角点から剣岳を測量しただけで、剣岳からの測量は行なわれなかつた。話はかわるが、測量隊と現地で会つた記録

に、烏帽子岳での百瀬慎太郎のものがある。大正二年八月のことで、「軍と書いた紅白の旗のたつたテントの中から、例の測量隊の技師が人夫と二人でとび出して来て」「山を想へば」となつてゐる。測量隊は携帯テントに手製の炬燵までもつていて、次の日は慎太郎の一行といつしよに野口五郎岳の方へ移動している。赤と白に半々に色分けた旗は、たしかに陸地測量部の旗である。この時はすでに五万の地図は刊行されてゐたから、補足的な測量なのかも知れない。

八右衛門の岳とは、現在の霞沢岳である。明治四十四年に、小島鳥水一行は三俣蓮華岳で霧にまかれて方角を失つてしまひ、案内の嘉門次にも現在地がわからなくなつたことがあつた。「霧の幕がちよいと開いて、蓮華岳の三角測量標と、黒岳の雄大な顔が直ぐ眼の前に突き立つた。我々は前蓮華の雪田に落ち込んでいたことが即く解つた。」という次第であつた。

小島鳥水も、明治三十九年に常念へ向つて初縦走したおりに、二の俣小屋のあたりで測量隊と出会つてゐる。

三角標の木組みは相当後になるまで立つてゐたものと見えて、大正十三年に南岳から大キレットを越えて前穂高まで来た藤木九三は、「今まで通過してきた穂高の連嶺のうちで、三角測量のヤグラが現存してゐたのはこの頂上だけだつた。」(「ある山男の自画像」)としてゐる。加藤文太郎が黒岳(水晶岳)へ登つた昭和六年一月の記録の中には、「頂上を過ぎて一つ向いの三角点のところまで行つたが、櫓の朽木が二、三本立つてゐるだけで(雪があつて)三角標石は見えなかつた。」(「単独行」)といふのがあつた。

さて剣岳に三角点がないことは、先にも述べたとおりであるが、剣岳の三角点については後になつておもしろい事件が起つた。

大正四年の夏、富山師範の一行十八人が案内人といつしよに剣岳に登つた時、霧が出ていて眺望がきかなかつたため、前剣のあたりで、これが剣岳の頂上だと案内人にいわれて一行はそこから引き返した。それを疑問に思つた一人が発表して問題になつたのだが、案内の佐々木助七が、頂上といふところで、「剣の絶頂に三角点などない。」といつたといふのである。少なくとも三角点に関しては助七の言葉が正しかつたことになる。

3、「五万分の一」と登山者  
測量がすんでからも、三角点は登山者にとつて絶好の目標物となつた。  
穂高一槍ヶ岳を初縦走のため奥又白から前穂高に登つてゐた鶴殿正雄の文には、「急速右に折れ三角点目標に登る。」などある。大正二年には、百瀬慎太郎は、蓮華岳の三角点の柱石を枕にいびきを立ててゐる林蔵をゆり起こした、との文も見える。

「山と渓谷」通信員  
三角点は、測量のり別の三角点から見通すのに判然とするために、その上に四本の木で組まれた櫓を立てた。  
「神河内」には、「宿(上高地温泉)から見える三角点は六宝山と称せられ、最高峰八右衛門の岳は右の前山に隠れてゐるから、梓川原からはその三角標を仰ぐことはできない」とあるが、上高地から見えた三角標といふのは、もちろん三角標のことである。また、

山と博物館 第19巻第10号

発行所 長野県大町市TEL②〇二一

印刷所 大町市下町山岳博物館

定価 年額四〇〇円(送料共)

郵便振替口座番号(長野三三、二九三)